

## 高田十郎『奈良雑筆』ノート ——まぼろしの手控え帳をめぐる覚書——

杉 崎 貴 英

多くの友人がもう知って居るであらうことは、高田君は名代の筆豆であつて、しかも発表欲の少しく淡い人である。奈良を第二の故郷としてから三十何年、「奈良雑筆」といふものを書き続けて居るのは有名な話で、昨今はまだ三百巻も越して居るさうなのに、何のかのと言つて一向に弘く人に見せてくれようとしめない。  
——柳田國男

### はじめに

冒頭に掲げたのは、柳田國男（1875～1962）が昭和18年（1943）に記した文章の一節である<sup>(1)</sup>。「高田君」とは、柳田と同じく兵庫県播磨地域の出身であった高田十郎（1881～1952）のこと。早稲田大学を卒業した明治40年（1907）に奈良県師範学校へ赴任、昭和6年に退職するまで国語漢文科の教鞭をとった高田は、在職中から奈良の内外に住まう人々と交友し、地域史・美術史・歴史考古学・民俗学など、人文学の諸分野にわたり旺盛な調査と発信を展開した在野研究者である。まさに学際的研究の実践者にして、「奈良学」の先駆者と称してよい。

高田の代表的な著作『奈良百題』（青山出版社、1943年）には、書名のごとく多彩なエピソードが並ぶ。その一つ、昭和16年（1941）1月19日、奈良郷土会月次例会として高田家を会場に開催された「家蔵品の小展覧会」の話<sup>(2)</sup>には、陳列した品を記すなかに「『奈良雑筆』その他の手記類八九十冊」がみえる。つづく文中に高田は記す。「『奈良雑筆』の一冊を、もと司法官の矢崎憲明翁が見るうちに、忽ちクスクスと笑い出す。もと検事だった某弁護士、転職の動機についての逸事談に行きあたつたのだつた」。この一節が端的に伝えるごとく、柳田も注目した『奈良雑筆』は、多彩な話題を記録・蓄積し続けた手控え帳であつたらしい。

高田は、大正9年（1920）～昭和8年（1933）にわたりガリ版刷りの個人雑誌『なら』を発行した。いまや稀覯に属すものの、57号までの全容を復刻版でみることができ<sup>(3)</sup>、近時には「国立国会図書館デジタルコレクション個人送信サービス」で誌面の精細な画像を閲覧することも容易となった<sup>(4)</sup>。いっぽう『奈良雑筆』は、柳田が記すごとく、高田の生前から知る人ぞ知る存在であつたようだ。1970年代にはブラウン管に映ったこともあつたらしいが、平成の30年間、これを直接に参照した言述は確認できず、まぼろしの存在といつてよい。

本稿では、『奈良雑筆』をめぐる情報を高田および他者の著述から拾いあつめ、「奈良学」の先駆者が蓄積していた魅力的な手控え帳に改めて光をあてようとするものである。実態に近づき、『奈良雑筆』に注がれたまなざしをもとらえようとする目的から、言述の引用が多

くなることをお断りしておきたい。

## 1. 「奈良雑筆目録」とその「はしがき」

先に述べた高田の個人雑誌『なら』は、大正13年（1924）11月に刊行した31号に「奈良雑筆目録」を載せており、「巻百六十一」までは目次をも知ることができる。紙幅の都合上、そのすべてを掲げることはできないため、目次を略した簡明目録を【表1】として掲げておく。しかし奈良の内外にわたる多彩な内容は、これによるのみでもご理解いただろう。

目録に先立ち掲げられている「はしがき」をみておきたい。長文をいわず、全文を引用することとする。なお以下、引用箇所において漢字は原則として通行の字体に統一し、合字の類は通行の仮名文字に改める。□は判読不能の箇所を示す。

「奈良雑筆」ハ、ワタシガ、明治四十年九月廿五日ニ、東京カラ奈良ニウツッテ以来ノ、家蔵ノ随筆デアル。満十七年ノコトシ大正十三年ノ九月廿五日デハ、百五十四冊トナツテキル。コレニハ、イササカ沿革ガアル。

東京デハ、常ニ、半紙ヲ三四十枚ツツトデテオイテ、何カトカキツケテハ、シマヒコンデキタ。「奈良雑筆」モ、ヤハリソノ寸法デデキテキル。シタガキヲ作ラナイデ、ウチツケニカクノガ、普通ダガ、中ニハ、シタガキニヨッテ、清書シタ部分モアル。近來ハ又、ハジメカラ白紙ヲトゲルカハリニ、一題目ツツ別々ニカキチラシタモノヲ、ヨイコロニ、集メテトゴ合セルト云フコトモヤッテキル。

明治四十年ノ秋、ハジメテ奈良ニキタ当座ハ、シバラク筆ハトラナカッタ。五ヶ月目ノ明治四十一年一月ノ末、二十八日ニ至ッテ、「寧楽雑筆」ト名ヅケル随筆ヲオコシタ。イマ、「奈良雑筆」ノ巻ノ四トナツテキルノガ、ソレデアル。東包永町ノ、故ノ山本喜七郎氏ノ裏座敷デ、マダ家族ヲ国ニヨイテノ一人住居ノトキノコトデアッタ。ソノ后、カキサシニシタリ、下ガキノママニオイタリ、或ハカキミテナガラモ、巻ノ番号ガツケラレナカッタリシタモノヲ合セテ、七八冊トモ八九冊トモイフベキ有様デ、明治四十二年ノ秋ゴロカラ、久シクトドコホッテシマッタ。当時、「寧楽」ハ「ネイラク」トヨンデキタ。

四十三年ノ十一月三日ニ、アラタメテ「鹿淵雑筆」ヲオコシタ。只一冊ダケガ、マタカキサシデ、トドコホッタ。イマ「奈良雑筆」ノ巻ノ十トナツテルノガ、ソレヲ補ッタモノデアル。鹿淵トハ、当時ノ雅号ノ一ツデ、郷里ノ「イリカブチ」（入鹿淵）トイフ池ノ名カラトッタモノデアッタ。

四十四年ノ五月一日カラ、妻子ガ国カラウツッテキテ、共ニクラスコトニナリ、ツイテ、八月三十一日カラ、小西町ノ北端ニ一戸ヲカリテ、ヒキウツッタ。ココニハ、足カケ四年キタ。コノ間ニハ、冊子ニマトメタ随筆ハ、ナカッタ。

大正三年八月十日ニ、大豆山（マメヤマ）町にウツッタ。四年三月五日ニ至ッテ、サラニアラタメテ、「菽山随筆」ヲハジメタ。シカシ、コレモ、一冊ノカキサシデ、トマッテシマッタ。ソノ序文ハ、イマ「奈良雑筆」ノ巻ノ十九ニ、記事ハ、巻ノ七十六ノ一部ニ

ヲサマツテキル。「菽山」トハ、地名ノ「マメヤマ」カラトツタ名デアッタ。

大正六年七月七日ニ、西紀寺（ルビ「ニシキデラ」）町ノ東端ニウツタ。紀寺東口町ノトナリ合セダカラ、私ニ西紀寺東口ト称シテキル。ソノ八月二十六日カラ、「紀寺雑筆」ヲオコシタ。従来ノ隨筆ハ、東京ニシテモ奈良ニシテモ、所謂文語体デアルノヲ本体トシテキタ。シカシ、口語体コソ、今日ノ真ノ文体トハ、ココ数年来、イヨイヨ、理窟デナクテワガモノニナツテキタカンガヘデアッタ。一昨年、カノ「菽山隨筆」ヲ思ヒタツトキニ、全クソノ道デスメテイクツモリデアッタ。今度ノ「紀寺雑筆」ハ、無論ソレナノデ、要スルニ、カキヤスイ文章デ、ヨミヤスイ□□発表ヲシテイキタイ希望デ、トリカカッタ。

大正七年ノ二月ニ、「紀寺雑筆」ハ、卷ノ十一ニ（ママ）ナツテイタ。ココデ、名称ヲ「奈良雑筆」ト改メルコトニシタ。「紀寺」（キデラ）デハ、セマクモアリ、ヨミニクモアリ、「奈良」ノ方が、平易デ、トホリガヨイカラデアル。コレデ、十年ノ十一月頃ニ、五十四五卷マデススンデキタ。

一方デハ、カノ「寧楽雑筆」ノヘンニナツテキルノヲ、何トカ整理シタイト、ツネニ氣ニカカツテキタ。ソレガマタ、コンナ風ニアラハレテイッタ。

ワタシノ手許ニハ、番号ヲオツテノ隨筆ノ外ニモ、トキドキカキアツメタ小冊子ガ、イクラカアル。マタ、コトニ明治四十三四年コノカタノ作業デ、従来ノ手扣ヘ物ヲバ、全ク文飾ヌキノ筋ガキ骨ガキニ清書シタ「バラガミ物」ガ、相当ニタマツテキル。大正九年ノ五月ノ中旬ニ、コレラノ散佚シサウナ部分ヲ、イクラカ分類シテ、二十二冊バカリニトゾウケタ。ツイテ、十年ノ六月廿六日ニ至ツテ、ソレヲ目錄記入モヲハツテ、アラタニ、「寧楽雑筆」ニ編入スルコトニシタ。シカシ、本来ノ「寧楽雑筆」幾冊ノ整理ニハ、マダヤハリ手ガツイテキナイノデアッタ。

大正十年十一月ニ至ツテ、「奈良雑筆」ハ、第二ノ改革ニアッタ。即チ、「寧楽雑筆」ノ三十幾冊ト、ソノ他若干トヲ合セテノ四十冊トイフモノガ、アラタニ併合サレタノデアル。サキニ、口語体、文語体デ、區別シテキタガ、モト程度ノ問題デアル。カウ考ヘテノ結果デアッタ。コレデ、モトノ「寧楽雑筆」ノ第一卷ガ、新「奈良雑筆」ノ卷ノ一トナリ、モトノ卷ノ一ハ、四十一トヨバレルコトニナツタ。随ツテ、スベテデハ、九十幾卷トカゾヘラレルワケニナツタ。シカシ、最初ノ「寧楽雑筆」ノ未整理ノ部分ハ、ナホ、ソノマ、デアッタ。

十一年ノ九月六日ニナツテ、卷ノ四十ト四十一トノ間ニ、サラニ旧作ノ冊子十冊ヲ加ヘルコトニシタ。即チ、モトノ「紀寺雑筆」系ノモノハ、新タニ卷ノ五十一以下ニクリサゲラレルコトニナツタノデアル。コレデ、総数ハ百七卷トナツタ。カノ未整理ノトコロモ、コノ年八月ニ補修サレタ。

ソノ后、一二ヌキサシシタ冊子モアルガ、マヅ今日マデハ、変化ナシニ、進ンデキテ、百五十四ノ数ヲ示シテキルノデアル。コノアヒダニ、ワタシハ、昨大正十二年九月七日ニ、同ジ町内ノ、一軒西ノ家ニ転居シタ。

大正十三年九月二十五日ノ夜一時、

奈良、西紀寺町ノ宅デ、高田十郎シルス。

【表1】『なら』第31号「奈良雑筆目録」の「凡例」と、巻1～巻161の略書誌

## 凡 例

- 一、巻号ノ下ニ、紙数、内容ノ概約、作ッタ時期ナドヲ注記スル。
- 二、紙数ハ、上下ノ表紙二枚ヲノゾイタ外ノ、墨付キノ分。
- 三、「年月日草、年月日清書」ト注シタモノハ、「シタガキ」ノアッタモノデアル。  
ソノ他ハ、ウチツケニカイタモノ。
- 四、「綴合」ト注シタノハ、バラ紙ニカイタノヲ、綴合セテ冊子ニシタモノ。
- 五、年月日ハ「明四二、三ノ一六―大正元、九ノ二七」（明治四十二年三月十六日ヨリ、大正元年九月二十七日マデ。）ノ形ニカク。後ニ大正バカリニナルト、年号ヲ略スルコトモアル。
- 六、各章ニモ、必要ト思ハレルモノニハ、括弧内ニ略注ヲ施ス。
- 七、雑筆ニハ、毎巻ノハジメニ、「ハシガキ」ト、目次トラ、オイテル。ココニハ、ソノ記載ヲ省略スル。但、「ハシガキ」ノ中、特ニ多少ノ工夫ヲコラシタ小品文ニ属スルモノダケハ、記載シテ、内容ヲモ注記スル。
- 八、挿絵は大抵記載スル。時ニハ、著シモノノ外ヲ省略スル。
- 九、用紙ハ、スベテ半紙ガタデ、大正二年ノ上半頃マデハ罫紙、以後ハ白紙ヲ普通トシテキル。
- 十、奈良デハ、奈良県師範学校ニ奉職シテキル。ソノ辺ニ関シタ記事ヤ用語ガ、自然多クナッテキルダラウ。

巻次	紙数	概要の記載	当該巻の成立年月日に関する記載
巻001	77枚	明治四十年秋、奈良住居ノ初、地方遊覧小記録。 モト「寧楽雑筆」巻一。	明治41年、「草」。明治42年9月25日～11月15日、「綴合」。
巻002	36枚	明治四十年十一月初ヨリ、十二月初マデノ、大和山城ノ小遊記。モト「寧楽雑筆」巻二。	明治41年8月、「草」。 大正7年2月15～21日、「清書」。
巻003	37枚	金剛山遊記、及、会食ノ記。 モト「寧楽雑筆」ノ三。	明治40及41年「草」。 大正7年2月27日～3月11日、「清書」。
巻004	46枚	主トシテ、奈良地方ニテノ見聞。 モト「寧楽雑筆」ノ四。	明治42年1月28日 ～大正11年8月20日
巻005	45枚	大和ノ見聞、及感想。 モト「寧楽雑筆」ノ五。	明治41年4月5日～9月9日
巻006	44枚	雑録。モト「寧楽雑筆」ノ六。	明治41年12月19日 ～同42年1月4日
巻007	52枚	感想ト見聞。モト「寧楽雑筆」ノ七。	明治42年4月13日～10月11日
巻008	27枚	感想及見聞。	明治42年8月、「草」。 大正11年8月21日、「清書了」。
巻009	31枚	全前、草。[…] 見聞雑録。	大正11年8月21～24日、「清書」。
巻010	43枚	見聞、感想及人物談。	明治43年11月3日「『鹿淵随筆』ノ第一巻トシテ作りハジメ」、 大正11年8月27日、「補修了」。
巻011	44枚	年中行事三種及奈良名所案内。	大正11年8月28日、「綴合」。
巻012	53枚 外ニ挿 図1枚	春日山一周記、宇治遊記、 及、アイヌ人観覧ノ記。	大正10年11月、「綴合」。
巻013	46枚	講演ノ記録二篇。	(2編とも大正元年11月上旬の講演)
巻014	34枚	大和人物談。	(年月日に関する記載なし)
巻015	54枚	紀行文及談話筆記。	大正10年11月、「綴合」。
巻016	43枚	紀行及講話聞書。	大正10年11月、「綴合」。
巻017	48枚	見聞及経歴談。	大正10年11月、「綴合」。

高田十郎『奈良雑筆』ノート

巻018	48枚	軍事関係ノ事ノ聞書、及ビ人物談。	大正10年11月、「綴合」。
巻019	57枚	人ノ為ニ作ツタ儀礼用ノ文、談話ノ聞書等。	大正10年11月、「綴合」。
巻020	52枚	各地ノ土俗。	大正10年11月、「綴合」。
巻021	28枚	小遊記三篇。	大正11年9月、「綴合」。
巻022	68枚 外二 横長 挿図2	明治44及大正元年、磯城高市両郡内、修学旅行 見聞。ソノ他。 *モト「磯城ト高市」トナツケター冊。 *45図入。	「ソノ年、記。」 (明治44年・大正元年)
巻023	47枚	主トシテ、大和ノ地誌の資料。 *37図入。	大正10年11月、「綴合」。
巻024	39枚	大和ノ小踏査記デ、大正元年カラ、二年ニワタ ツテ、デキタモノ。*10図入。	大正10年11月、「綴合」。
巻025	42枚	大正三四年中ニデキタ大和ノ地誌の小記録、 ナラビニ、古人遺墨ノウツシ。	大正10年11月、「綴合」。
巻026	40枚	大正四一六年中ノ大和ノ見聞。	大正10年11月、「綴合」。
巻027	34枚	明治四三—四年中ノ、大和及ソノ他ノ見聞。	大正11年11月、「綴合」。
巻028	43枚	大正4年3月30日～4月19日、「記」。	
巻029	35枚	法隆寺ニ関スル見聞。	大正10年11月、「綴合」。20図入。
巻030	61枚	奈良市内ノ見聞。	「大部分ハ明治四三ノ記録。」 大正10年11月、「綴合」。42図入。
巻031	69枚	奈良市内ノ神社ニ関スル見聞。	「主トシテ、明治四三—四五ノ執 筆。」 大正10年11月、「綴合」。30図入。
巻032	58枚	主トシテ奈良市内ノ寺又ハ仏事ニ関スル見聞。	「大部分ハ明治四三—五ノ執筆。」 大正10年11月、「綴合」。24図入。
巻033	57枚	東大寺ニ関スル見聞。	「明治四四—大正三、執筆。」 大正10年11月、「綴合」。図入。
巻034	48枚	春日神社、ナラビニ其祭曲ニ関スル見聞。	「明治四一—大正三、執筆。」 大正10年11月、「綴合」。
巻035	45枚	主トシテ、奈良市内ノ地誌の雑録。	「大正三年以前位ノコト。」 大正10年11月、「綴合」。
巻036	38枚	大和以外ノ各地ノ見聞雑録。	大正10年11月、「綴合」。
巻037	51枚	大正四年十月ニ作ツタ「山陽道ノ伝説」。	大正11年11月11日、「収ム」。
巻038	41枚	大和及諸地方ノ土俗言語ニ関スル資料。	大正10年11月、「綴合」。
巻039	52枚	大正四年中ノ見学小旅行記四篇。	大正10年11月、「綴合」。
巻040	38枚	大正五及六年中ノ小旅行記三篇。	大正10年11月、「綴合」。
巻041	50枚	奈良博物館観覧記ノ一。	「明治四三年中ノコト。」
巻042	51枚	全前ノ二。	
巻043	59枚	全前ノ三。	
巻044	42枚	全前ノ四。	
巻045	29枚	全前ノ五。	
巻046	23枚	大観楼ノ記。	大正11年9月、「収ム」。
巻047	36枚	八百歩ノ記。	大正11年9月、「収ム」。
巻048	66枚	南都橋梁記。	大正11年9月、「収ム」。
巻049	56枚	奈良デ目ニシタ樹木ノ記載。	大正11年9月、「収ム」。
巻050	32枚	諸地方の「マツリ」ノコト。 大正三、四年頃聞書。	大正11年9月、「収ム」。
巻051	35枚	モト、紀寺雑筆第一巻。紀寺ノ新居ト、ソノ町 内ナラビニ登校ノ途中ノコト。	大正6年8月26～29日、「記」。
巻052	31枚	モト、紀寺雑筆第二巻。紀寺ノ村社崇道天皇神 社境内ノ金石文ノ記載。	大正6年8月29～31日、「記」。
巻053	42枚	モト、紀寺雑筆第三巻。雑話。	大正6年9月1～9日、「記」。
巻054	33枚	モト、紀寺雑筆第四巻。雑話。	大正6年9月10～13日、「記」。 11月23日、「改訂」。
巻055	31枚	モト、紀寺雑筆第五巻。雑話。俗謡アツメ。	大正6年9月14～17日、「記」。

高田十郎『奈良雑筆』ノート

巻056	47枚	モト、紀寺雑筆第六巻。京都紀行。	大正6年9月18日～10月1日、「記」。
巻057	42枚	モト、紀寺雑筆第七巻。諸氏ノ詞藻アツメ。	大正6年10月2～5日、「記」。
巻058	37枚	モト、紀寺雑筆第八巻。現代人物談。	大正6年10月12～25日、「記」。
巻059	51枚	モト、紀寺雑筆第九巻。 童謡アツメ（主トシテ大和）。	大正6年10月26日～11月6日、「記」。
巻060	36枚	モト、紀寺雑筆第十巻。雑話。	大正6年12月2～7日、2月5日、「記」。
巻061	53枚	ワガスキトキラヒノコト。	大正8年2月16日～6月6日、「記」。
巻062	33枚	大和ノ人物談、ソノ他。	大正7年1月20日～10月3日、「記」。
巻063	25枚	大和ノ見戯ト童謡。	大正7年10月4～6日、「記」。
巻064	23枚	主トシテ、奈良ニ関スル雑話。	大正7年10月19～21日、「記」。
巻065	28枚	奈良ニ関スル雑話。	大正7年11月19～21日、「記」。
巻066	30枚	感相（マ）及見聞。	大正8年5月15～25日、「記」。
巻067	26枚	雑話。	大正8年9月4～8日、「記」。
巻068	27枚	俗謡アツメ。	大正8年5月27～28日、「記」。
巻069	27枚	俗謡アツメ。	大正8年5月28～30日、「記」。
巻070	29枚	古瓦採集ノ記。	大正8年9月9～15日、「記」。
巻071	23枚	地理考古ノ資料。	大正8年9月19～20日、「記」。
巻072	32枚	地理考古資料。	大正8年9月21日～10月2日、「記」。
巻073	37枚	東大寺真言院ト附近ノ金石文。	大正8年10月1日～11月5日、「記」。
巻074	28枚	見聞ノ雑録。	大正8年11月15日～12月19日、「記」。
巻075	27枚	現代人物談。	大正8年12月4～6日、「記」。
巻076	29枚	現代人物談。	大正8年12月6～8日、「記」。
巻077	27枚	現代人物談。	大正8年12月9～13日、「記」。
巻078	37枚	大正八年ノ年始状ノコト其他。	大正8年12月30日 ～大正9年2月8日、「記」。
巻079	26枚	主トシテ大和ノ金石文ノ記載。	大正9年2月16～17日、「記」。
巻080	25枚	奈良ニアル歴史資料。	大正9年2月17～22日、「記」。
巻081	28枚	人物ソノ他雑談。	大正9年2月23～25日、「記」。
巻082	33枚	雑談。	大正9年2月25～4月23日、「記」。
巻083	35枚	大和デノ小旅行記ト、鐘ノコト。	大正9年3月4～12日、「記」。
巻084	36枚	大和ノ鐘ノコト。	大正9年3月13～24日、「記」。
巻085	29枚	奈良及附近ノ金石文ヲ主トシタ記事。	大正9年3月24～31日、「記」。
巻086	30枚	大和デノ小踏査記。	大正9年3月31日～4月4日、「記」。
巻087	31枚	大和デノ小踏査記。	大正9年4月5～14日、「記」。
巻088	28枚	ハジメテ「石ズリ」ヲ覚エテ以后ノ其日記ノ一。	大正9年4月25～30日、「記」。
巻089	26枚	右ノ石ズリ日記ノツマキ、及、小踏査記。	大正9年4月30日～5月4日、「記」。
巻090	31枚	奈良ト附近ニ於テノ見聞及山城遊記一篇。	大正9年5月6～10日、9月26日、「記」。
巻091	28枚	大正九年中、大和デノ小遊記五篇。	（「綴」とのみ記載、その日付なし）
巻092	31枚	奈良ノ見聞。	大正10年中、記。綴合。
巻093	24枚	大和ノ土俗ニ関スルコト。	大正9年10月8日 ～11年9月10日、「記」。
巻094	31枚	各地ノ土俗関係ノコト。	大正11年9月11～14日、「記」。
巻095	24枚	（表題的な記載はなし）	大正10年、「綴合」。
巻096	25枚	人物ソノ他雑談。	大正10年6月14～15日、「記」。
巻097	33枚	奈良デノ地歴的見聞。	大正10年、「記」。
巻098	26枚	銘文ヲ中心トシテノ奈良博物館観覧記。	大正10年9月9～14日、「記」。
巻099	31枚	製作上ノ動植物ヲ中心トシテノ全観覧記。	大正10年9月14～22日、「記」。
巻100	29枚	奈良博物館ノ、定例陳列替ヘノ絵画ヲミタ記事、 三篇。	大正10年9月、「記」。
巻101	36枚	主トシテ、各地ノ土俗ニ関スルコト。	大正10年5～9月、「記。綴合」。
巻102	28枚	見聞ノ雑談。	大正10年10月18～19日、「記」。
巻103	27枚	見聞ノ雑記。	大正10年10月19～24日、「記」。



高田十郎『奈良雑筆』ノート

巻104	40枚 (内一、 拓本)	生駒郡有里ノ往生寺、及ビ高瀬氏ノ金石文、古文書ノ記載。	大正10年10月30日～11月2日、「記」。
巻105	32枚	主トシテ、奈良ノ金石文ノコト。	大正10年11月2日～22日、「記」。
巻106	39枚	奈良ノ見聞ト、大原氏ノフランス名画展観覧記。	大正11年1月16日～2月5日、「記」。
巻107	31枚	見聞雑話。	大正10年11月11日 ～11年3月2日、「記」。
巻108	36枚	大正十一年七月ノ奈良ノ地藏祭ノコト。	大正11年9月7～9日、「記」。
巻109	37枚	主トシテ奈良市内ノ見聞。	大正11年9月29日、「綴合」。
巻110	33枚	感想ト雑録。	大正11年9月29日、「綴合」。
巻111	38枚	奈良ニ関スル地歴の見聞ト、伊勢ノコト一篇。	大正11年10月2日、「綴合」。
巻112	40枚	(表題的な記載はなし)	大正11年10月3～6日、「記」。
巻113	36枚	(表題的な記載はなし)	大正11年11月7～8日、「記」。
巻114	36枚	大正三年以来、人ノ為ニ作ツタ文、ナラビニ折々ノ感想。	大正11年10月12日、「綴合」。
巻115	35枚	感想。	大正11年10月17日、「綴合」。
巻116	38枚	感想ソノ他。	大正11年10月19日、「綴合」。
巻117	34枚	見聞雑録、及ビ、来東ノ若干。	大正11年11月5日、「綴合」。
巻118	33枚	正倉院御物ノ第二回拝観記。	大正11年6月9日、「記」。
巻119	40枚	大正五年末カラ六年ハジメニカケテ、金石文ノ主トシテノ奈良ノ寺メグリノ記。	大正11年11月14日、「記了」。
巻120	32枚	奈良市内ノ見聞、郡部ノ踏査ノ記一篇。	大正11年11月15日、「綴合」。
巻121	32枚	現代人物談。	大正11年11月19日、「綴合」。
巻122	32枚	現代人物談。	大正11年11月22日、「綴合」。
巻123	52枚	家藏品目録ノ一。	大正11年12月10～23日、「記」。
巻124	37枚	家藏品目録ノ二。	大正11年12月24日 ～12年2月18日、「記」。
巻125	34枚	全三。	大正12年5月28～31日、「記」。
巻126	22枚	全四。	大正12年5月31日～6月2日、「記」。
巻127	40枚	全五。	大正12年6月2～5日、「記」。
巻128	29枚	全六。	大正12年6月6～12日、「記」。
巻129	38枚	十二年一月、奈良デノ見聞。	大正12年1月23～29日、「記」。
巻130	38枚	雑聞。	大正12年3月30日、「綴合」。
巻131	36枚	感想、及旅行記。	大正12年3月30日、「綴合」。
巻132	31枚	主トシテ、大和ノ古跡、土俗ソノ他。	大正12年3月30日、「綴合」。
巻133	34枚	奈良デノ見聞雑録。	大正12年5月6日、「綴合」。
巻134	31枚	主トシテ奈良ノ雑観。	大正12年5月25日、「綴合」。
巻135	32枚	現代人物談ソノ他ノ見聞。	大正12年5月25日、「綴合」。
巻136	27枚	薬師寺ノ修二会ト、矢田寺ノ大練供養ノコト。	大正12年5月25日、「綴合」。
巻137	32枚	磯城郡ノ瑞花院ユキノ紀事二篇。	大正12年5月26日、「綴合」。
巻138	32枚	台湾ノ林氏一行来遊ノトキノコト。	大正12年7月15～25日、「記」。
巻139	26枚	大正九年十年ニウケタ年始状ノコト。	大正12年7月26～27日、「綴合」。
巻140	29枚	主トシテ大正八九年中ノ見聞。	大正12年7月28日、「綴合」。
巻141	33枚	現代人物談、ナラビニ見聞雑録。	大正12年9月8日、「綴合」。
巻142	28枚	主トシテ大和ノ金石文。	大正12年10月29日、「綴合」。
巻143	21枚	河内道明寺辺カラ、大和ノ多武峰ニカケテノ小旅行記。	大正12年10月29日、「記了」。
巻144	34枚	土俗談。	大正12年12月6日、「綴合」。
巻145	29枚	奈良ノ子供アソビ。	大正12年11月27日、「綴合」。
巻146	29枚	講演談話筆記。	大正12年12月16日、「綴合」。
巻147	28枚	講演筆記。	大正13年1月5日、「綴合」。
巻148	33枚	童謡アツメ。	大正13年1月6日、「綴合」。
巻149	39枚	現代人物談、ソノ他ノ見聞雑録。	大正13年1月7日、「綴合」。

巻150	31枚	現代人物談。	大正13年1月10日、「綴合」。
巻151	26枚	全国書画大会中ノ見聞。	大正13年1月13日、「綴」。
巻152	34枚	十三年一月中ノ感想。	大正13年1月22～31日、「記」。
巻153	37枚	十三年八月末、山辺郡東里村ノ紀行、ソノ一。	大正13年9月7～17日、「記」。
巻154	31枚	全上ソノ二。	大正13年9月18～24日、「記」。
巻155	49枚	全上ソノ三。	大正13年10月21～27日、「記」。
巻156	45枚	全上紀行ノ補遺。	大正13年10月28日～11月2日、「記」。
巻157	31枚	大和及比附近ニ関スル見聞。	大正13年10月5日、「綴合」。
巻158	33枚	奈良及比附近ノ地歴的資料。	大正13年10月8日、「綴合」。
巻159	38枚	宇智郡五条カラ西、紀州境マデノ沿道ノ踏査記。	大正13年10月10～14日、「記」。
巻160	39枚	主トシテ大和ノ金石文、古文書ソノ他。	大正13年11月8日、「綴合」。
巻161	34枚	現代人物ソノ他ノコト	大正13年11月10日、「綴合」。

【附】－他者の言及から知られる、以降の巻の内容

\* 典拠は【表3】の当該年代・筆者を示す。同じ巻・内容への言及が複数ある場合は初見のみ示す。

巻次	他者の言及から知られる内容	執筆ないし成立年代	典拠
巻202	宇智川磨崖碑（奈良県五條市）に関する情報を含む	昭和2年（1927）6月	田村1948
巻226	土佐地域の梵鐘の銘文に関する情報を含む	昭和14年（1939）以前	坪井1939
巻227	土佐地域の梵鐘の銘文に関する情報を含む		
巻229	土佐地域の梵鐘の銘文に関する情報を含む		
巻230	備後・伊予・土佐の梵鐘の銘文に関する情報を含む		坪井1955
巻239	播磨地域の梵鐘の銘文に関する情報を含む	—	坪井1955
巻316	大阪の後藤捷一を3月28日に訪問した際の記録	昭和18年（1943）4-7月	後藤1953

【表2】『奈良雑筆』の形成過程（巻161まで）

\* 基本的に「奈良雑筆目録」の「はしがき」に拠り、目録の内容や「日誌」も参照した。

明治40年	1907	9.25	（高田十郎、東京から奈良に移住）
明治41年	1908	1.28	『寧楽雑筆』と名付けた随筆を書き始める。
明治42年	1909	秋頃～	『寧楽雑筆』、しばらく執筆が停滞する。
明治43年	1910	11.3	『鹿淵雑筆』の表題で執筆を再開。
明治44年	1911	5.1	（高田、妻子と同居する）
大正3年	1914	8.10	（高田の一家、奈良市大豆山町に転居する）
大正4年	1915	5.3	『寂山随筆』の表題で執筆を再開。 ただし、書きかけで中断する。
大正6年	1917	7.7 8.26	（高田の一家、奈良市西紀寺町に転居する） 『紀寺雑筆』の表題で執筆を再開。
大正7年	1918	2. —	『紀寺雑筆』は11冊目に入り、『奈良雑筆』と改題する。
大正9年	1920	5. 中旬	かつて「トキドキカキアツメタ小冊子」や、清書した「バラガミ物」などの「散佚シサウナ部分」を分類し、22冊ほどに綴じ分ける作業を開始する。
大正10年	1921	6.26	上記の作業を、目録（目次か）の記入まで完了し、 『寧楽雑筆』に編入する。
		11月頃	この時点で「本来ノ「寧楽雑筆」幾冊ノ整理」には未着手。 『寧楽雑筆』30数冊その他の雑筆類（計40冊）を併合。 旧『寧楽雑筆』第1巻を新たに『奈良雑筆』巻1とし、従来の『奈良雑筆』巻1は巻41と改める。この時点で90数冊。
大正11年	1922	8. —	『寧楽雑筆』のうち「未整理ノトコロ」を補修する。
		9.6	巻40・巻41の間に、「旧作ノ冊子」10冊を繰り入れる。 →『紀寺雑筆』由来の部分は「巻51」以下に繰り下げられ、 雑筆の「総数」は107巻となった。



大正12年	1923	9.7	(高田の一家、同じ西紀寺町内の隣家に転居する)
大正13年	1924	9.25	奈良への移住から満17年。この時点で154冊。 (日誌)「なら」三十一号ノ鉄筆原稿「奈良雑筆目録」着手。「雑筆」ハ、イマ百五十四冊。
		この間	『奈良雑筆』巻155～161、執筆あるいは「綴合」で成立。
		11.14	(日誌)「夜、「奈良雑筆目録」原稿スル。巻百六十一マデ。」
		11.18	(日誌)「なら三十一号、鉄筆原稿スマス。」

以上の内容のうち、形成過程については【表2】に年表化した。以下、あわせての参照に委ねたい。ここでは、高田が『奈良雑筆』をどのようなものとして自認し、どのように蓄積していたかについて、留意しておきたい諸点を摘記しておく。

第一に、高田が『奈良雑筆』を「家蔵ノ随筆デアル」と記していること。文芸作品としての性格・仕上がりを意識した随筆ではなく、近世以来の「形式の制約もなく内容も自然・人事・歴史・社会に関する見聞・批評・思索あるいは研究考証など、多岐にわたって筆の赴くままに書き記した散文の著作」<sup>(5)</sup>としての随筆であることはいうまでもない。

第二に、「はしがき」執筆時点までの『奈良雑筆』について「イササカ沿革ガアル」と切り出し、いささか煩瑣な経緯を、つぶさに記述していること。その周到さあってこそ【表2】に整理できた次第だが、「奈良雑筆目録」における一々の巻の記述とその「凡例」にも認めうように、自らの蓄積した「雑筆」とその書誌情報・形成経緯を自ら明記し、一連の『奈良雑筆』として第三者も理解可能なものとなるように意を尽くしたことがうかがえよう。

第三に、前記の点とあわせて注意をひくこととして、「近来ハ又、ハジメカラ白紙ヲトヂルカハリニ、一題目ツツ別々ニカキチラシタモノヲ、ヨイコロニ、集メテトヂ合セルト云フコトモヤッテキル」と述べていること。つまり『奈良雑筆』として統合されて以後にも、年月・巻を追った順序で記していくのではなく、未綴じの記入済み半紙(高田の言葉でいう「バラガミ物」)を整理・分類して綴じ、一冊(一卷)ずつに仕立ててゆく方法も採られていることである。【表1】の「当該巻の成立年月日に関する記載」欄を通覧すれば、たとえば巻130～132は大正12年3月30日に、巻134～136は同年5月25日に「綴合」がなされており、それらの巻が同じ一連の整理・分類作業によって成ったことが理解されよう。高田は東京在住の時代から「半紙ヲ三四十枚ツツトヂテオイテ、何カトカキツケテハ、シマヒコンデキタ」といい、「『奈良雑筆』モ、ヤハリソノ寸法デデキテキル」と述べているが、そうした方法で『奈良雑筆』の蓄積を続けたのは、出来合いの帳面を使うのでは得られない整理・分類・再編の便宜を重んじてのことでもあったのではないか。

## 2. 自他の言及にみる『奈良雑筆』

【表3】は、高田および他者による『奈良雑筆』への言及をふくむ文献を、管見に入った限りで年代順に集成したものである。これらからみえることを摘記しておこう。

### (1) 高田十郎の逝去と奈良県下での展示公開

高田が逝去したのは、昭和27年(1952)6月18日朝のことであった。澤田四郎作(1899

【表3】『奈良雑筆』に関する自他の言及

▼昭和戦前期／高田十郎の生前		
大正13年	1924	高田十郎「奈良雑筆目録」(『なら』31) * 巻161 (大正13年11月12日綴合) まで。
大正14年	1925	高田十郎「日誌」(『なら』32) * 「アタタカナ大晦日。(中略) 此一年間大小ノ罪八万四千。ソノ内、(中略) 筆サキノ罪ハ、 <b>「奈良雑筆」十六冊、「なら」七冊</b> 」。 東恩納寛惇『琉球人名考』〈 <b>「炉辺叢書」</b> 〉(郷土出版社) * 4月刊。巻末の「 <b>「炉辺叢書」</b> 」広告欄の「続刊」中に「 <b>奈良雑筆 高田十郎氏</b> 」。 * これ以後、「 <b>「炉辺叢書」</b> 」広告欄に同様の記載が載る(昭和2年〔1927〕3月刊の小山真夫『小県郡民謡集』まで)。
昭和14年	1939	坪井良平『慶長末年以前の梵鐘』〈東京考古学会学報第2冊〉(東京考古学会) * 巻頭の「凡例」で「引用の書名」のうち「特殊なものは或はわかりにくいことゝ思ふので誤解を避けるために左に註釈を加へる」として8件を列挙するなかに、「 <b>「奈良雑筆」高田十郎氏自筆の資料並随想記録</b> 」。 * 「慶長末年以前の有銘鐘年表」での参照・掲出は以下の通り。 No.068 (098頁) 竹林寺 (高知県) 鐘 「 <b>奈良雑筆第二二七ニ拠ル</b> 」 No.085 (100頁) 妙国寺 (高知県) 鐘 「 <b>奈良雑筆二二六ニ拠ル</b> 」 No.096 (101頁) 禪師峯寺 (高知県) 鐘 「 <b>奈良雑筆二二〇ニ拠ル</b> 」 No.224 (116頁) 横倉寺 (高知県) 鐘 「 <b>奈良雑筆二二九ニ拠ル</b> 」 No.271 (121頁) 長谷寺 (高知県) 鐘 「 <b>奈良雑筆二二九ニ拠ル</b> 」 * なおNo.167 (109頁) 酒見寺 (兵庫県) 鐘、No.191 (112頁) 大楽寺 (大分県) 鐘については参照源として「 <b>高田十郎氏蔵拓</b> 」とある。 「 <b>栄山寺に関する研究並に著作目録</b> 」(『大和志』6-1 〈 <b>栄山寺特輯</b> 〉) * 同号には高田も「 <b>栄山寺の金石文</b> 」を寄せる。
昭和16年	1941	高田十郎「奈良随筆」(『美術と趣味』6-5) * 同年1月19日に高田家を会場に開催された、奈良郷土会月次例会における「 <b>家蔵品の小展覧会</b> 」を述べる節で「 <b>「奈良雑筆」</b> その他の手記類八九十冊」。 * 「 <b>「奈良雑筆」</b> の一冊を、もと司法官の矢崎憲明翁が見るうちに、忽ちクスクスと笑ひ出す。もと検事だった某弁護士、の転職の動機についての逸事談に行きあたつたのだつた。節の末尾に「(昭和十六年二月七日夜記了)」。 [再録] 同『 <b>奈良百題</b> 』(南山出版社)。
昭和18年	1943	澤田四郎作「随筆 山村記 序」(高田十郎『随筆 山村記』桑名文星堂) * 「高田十郎氏は(中略) 史学、考古、民俗その他あらゆる部門にわたつての見聞を、すべて毛筆を以て書き綴つて来られ、その一つの「 <b>奈良雑筆</b> 」だけでも既に三百余冊に達してゐる」。 [再録] 同『 <b>異国より帰て</b> 』〈五倍子雑筆第11号〉(自刊、1949年) 柳田国男「随筆民話序」(高田十郎『随筆民話』桑名文星堂) * 「多くの友人がもう知つて居るであらうことは、高田君は名代の筆豆であつて、しかも発表欲の少しく淡い人である。奈良を第二の故郷としてから三十何年、「 <b>奈良雑筆</b> 」といふものを書き続けて居るのは有名な話で、昨今はもう三百巻も越して居るさうなのに、何のかのと言つて一向に弘く人に見せてくれようとしなない。もう十七八年前の事に、それを色々と勧め、やつと一冊だけ、其中から選み出したものを本にする約束をしてもらつて、大急ぎで「 <b>炉辺叢書</b> 」の近刊と予告したのだつたが、双方支度がひまどつて居るうちに、惜しくもふいになつてしまった。今回出る本は、定めて新たなる思ひ立ちであらうが、あの昔の約束の気が、りが幾分か背をつゝいて居らぬとも限らぬのである」。 * 「近年になつては、山中共古翁の「 <b>共古日録</b> 」、是が分量に於ても「 <b>奈良雑筆</b> 」に近いものであつたが、翁の没後誰かが私蔵してしまつて、ちつとも世の中の役に立つて居らぬ。勿論どのやうに筆豆であらうとも、一人の力ではさう大きな仕事は出来ぬかも知れない。私の目的は寧ろ斯ういふ流儀が、決して物好きや道楽でないことを例示して、後を嗣ぐ人の数を多くしたかつたのである」。 [復刻] 『随筆民話』〈柳田国男の本棚〉(大空社、1997年) [再録] 「 <b>老読書歴</b> 」中の一編として。 ①『柳田国男先生著作集』9 (実業之日本社、1950年) ②『定本柳田国男集』別巻4 (筑摩書房、1964年) ③『柳田国男全集』31 〈くちま文庫〉(筑摩書房、1991年) ④『柳田国男全集』新版18 (筑摩書房、1999年)
▼昭和戦後期／高田十郎の没後		
昭和23年	1948	田村吉永『 <b>栄山寺</b> 』〈近畿古文化叢書〉(河原書店)

		<p>*「榮山寺に関する研究并に著作目録」162頁に「明治四四・七 高田十郎 五條遊記 其一「榮山寺」「奈良雑筆」巻二七／其二「不動川涅槃経磨崖碑」」。</p> <p>「不動川涅槃経磨崖碑」は、五條市所在の国指定史跡「宇智川磨崖碑」をさす。</p> <p>*同164頁に「昭和二・六 高田十郎 榮山寺の銘文しらべー「一、宇智川磨崖碑」「二、榮山寺五輪小塔」「三八角門堂のこと」「奈良雑筆」巻二〇二」。</p>
昭和25年	1950	<p>瀧川政次郎『日本歴史解禁』（創元社）</p> <p>*「同（杉崎注、明治）四十四年、高田十郎氏は『五條遊記』（『奈良雑筆』巻二七所収）で此の碑のことを述べられた（以下略）」（同書170頁）。</p>
昭和26年	1951	<p>福山敏男・秋山光和『榮山寺八角堂の研究』（美術研究所研究報告）（便利堂）</p> <p>*「榮山寺文献目録」104頁に「七六 高田十郎 「五條遊記」 奈良雑筆巻二七、明治四十四年七月、寺。碑。未見。」「寺」は榮山寺、「碑」は宇智川磨崖碑。</p> <p>[再録] 福山敏男「榮山寺の歴史」</p> <p>（『寺院建築の研究 中』（福山敏男著作集2）中央公論美術出版、1982年）</p>
昭和27年	1952	<p>松本栖重・森川辰蔵編『奈良の本』（大和地名研究所）</p> <p>*巻末「執筆者一覧」の「高田十郎」の紹介文中に「未刊の奈良雑筆三百八十冊の大著もあって随筆家である」。</p> <p>（6月18日 高田十郎、逝去）</p>
昭和28年	1953	<p>後藤捷一「『奈良雑筆』に表れた私の図書室」</p> <p>（同『探墓掃苔録』〈郷土史談第7編〉大阪史談会）</p> <p>*「晩年までずっと続けられ、昭和二十七年一月現在三百八十三巻という膨大なものとなった。（中略）曩に刊行せられた『随筆民話』『随筆山村記』『奈良百題』など、何れも『奈良雑筆』からの抽出であることを思へば、この雑筆中には如何に貴重な資料が豊富に含まれてゐるか想像に難くない。</p> <p>*「その巻三百十六の一冊は全巻私の宅を訪問せられた記事で埋ってゐた。記念のため全文を掲載したいが多大の紙幅を要するので省略に従ひ、要所のみ抄出しこれに若干の関係事項を附することとする」。</p> <p>*『奈良雑筆』巻三百十六の目次と抄出を掲げ、『奈良雑筆』巻三百十六の第一丁表（実物大）（高田家蔵）を図で掲げている。その記載は「奈良雑筆 巻三百十六／高田十郎著／昭和十八年三月二十八日、大阪の友人後藤捷一君の蔵書を見にいつた時のことを、四月一日から記しはじめ、四日に作りあげて此の一冊とした。／昭和十八年四月四日午後一時四十分しるす。時に雨。また抄出のうち「十八、補遺」の末尾は「（昭和十八年七月二十七日・一時記しをはる。）」。</p> <p>*「公刊の都度寄贈をうけて架蔵するものに左の数書があり、これらが全部といつても過言ではない程『奈良雑筆』の子本であることを思へば、雑筆は高田君の代表作であり、事実四拾年近い歳月の緒余に成つた結晶でもある」。</p>
昭和30年	1955	<p>坪井良平「古鐘逸響年表稿」（『大和文化研究』3-3・4〔合併号〕〈梵鐘特輯〉）</p> <p>* No.036 高福寺鐘 （土佐国）「奈良雑筆二三〇」</p> <p>* No.221 新樂寺鐘 （土佐国）「奈良雑筆二二九」</p> <p>* No.252 若宮王子社鐘（播磨国）「奈良雑筆二三九」</p> <p>* No.298 観世音寺鐘（伊予国）「奈良雑筆二三〇」</p> <p>* No.300 延光寺鐘 （土佐国）「奈良雑筆二三〇」</p> <p>* No.368 光明寺鐘 （備後国）「奈良雑筆二三〇」</p> <p>* 末尾の「所拠文献目録」に「七二、奈良雑筆（高田十郎）自筆本」。</p> <p>坪井良平『古鐘逸響年表稿』〈大和文化叢書第1〉（大和文化研究会）</p> <p>* 10月刊。上記「古鐘逸響年表稿」と同じ内容。</p>
昭和33年	1958	<p>笹谷良造「奈良県」（『日本民俗学大系 第11巻 地方別調査研究』平凡社）</p> <p>*「高田十郎氏はこの『風俗志』（杉崎注、大正4年編纂の『奈良県風俗志』）が図書館（杉崎注、奈良県立図書館）に入る以前、久しく保管していた関係から、その試み（杉崎注、『奈良県風俗志』をもとに民俗誌を作成する試み）を行い（中略）自刊自筆の『奈良雑筆』などにもしばしば利用している」。</p>
昭和34年	1959	<p>澤田四郎作「高田十郎伝」（『日本民俗学大系 第10巻 口承文芸』平凡社）</p> <p>*「『奈良雑筆』は、明治四〇年の秋から書きはじめられ、昭和二七年一月二六日に至るまで三八二巻の膨大な量となっている。みずから墨筆をとり、氏一流の特徴ある筆跡で書かれたものである」。</p>
昭和37年	1962	<p>小林月史「奈良の小寺 高坊高林寺（2）」（『奈良県観光』69）</p> <p>*小林はNHK奈良放送局長（1960年7月～1963年6月）。</p> <p>*「高田十郎先生の『奈良雑筆』に、高林寺先々代寿明尼からの聞書が残っている。それによると（以下略）」。</p> <p>[再録] 小林月史「中將姫ゆかりの寺」（同『奈良の小寺』小林喜久一、1964）</p>

高田十郎『奈良雑筆』ノート

昭和42年	1967	<p>藤森栄一『二粒の粉』（河出書房）  * 巻末の文献リスト「森本六爾研究資料」中に「35 高田十郎 稿本「奈良雑筆」」。  「35」は注番号。本文の該当箇所は「佐々木和磨さんによれば」云々。  [改題]『森本六爾伝 弥生文化の発見史』（河出書房新社、1973年）  [再録]『藤森栄一全集 第5巻（旧石器の狩人・二粒の粉）』（学生社、1979年）</p>
昭和45年	1970	<p>坪井良平『日本の梵鐘』（角川書店）  * 典拠として「奈良雑筆（高田十郎）高田家蔵」と記載。  堀井甚一郎（奈良市史編集審議会編）『奈良市史 地理編』（奈良市）  * 「付 奈良の道標」の項に「数は旧市内で約80個」「旧市内の道標については高田十郎の『奈良雑筆』（明治末年）に詳しく記されている」（281～282頁）。</p>
昭和47年	1972	<p>乾健治『大和百年の歩み 社会人物編』（大和タイムス社）  * 「随筆家にして『奈良雑筆』三百八十四冊は、明治四十年から五十年間の見聞、調査、随筆などの記録である」。  片山清「備後国三原の鋳物師」（『史迹と美術』423）  * 「茲に坪井良平先生より故高田十郎氏の「奈良雑筆」にある土佐国常通寺鐘銘に関する資料を教示された。／これは高田氏が昭和三年高知図書館蔵の稲毛実編「土佐国古鐘類聚」の拓本より見写した資料であり光明寺鐘に関する第一等の資料である」。  坪井良平『日本古鐘銘集成』（角川書店）  * 「『奈良雑筆』巻二百三十に収められているものがそれで、特に『土佐金石文一斑』という表題が与えられている。高知図書館は戦災で焼失したと聞いているので、稲毛実蒐集拓本はこの高田十郎の筆写本以外には見ることができない」（34頁）。なお「塩澤1996」も参照。</p>
昭和52年	1977	<p>坪井良平『佚亡鐘銘図鑑』（ビジネス教育出版社） * 「私の師友 その一」の項。  * 「先生は常にノートと鉛筆とを携帯していて、人の話を聞いて書きとめる必要があると思うと「一寸待った」といっては、その要点を書きとめる（中略）先生はそれらの話とそのほかの所見、感想等を克明に随筆風に書き綴って、『奈良雑筆』と題する和紙綴りの半紙本に仕上げた。その全巻数は三百八十二冊に及ぶ」。  杉島平晴「奈良」（佐藤照雄編著『郷土史学習の展開』学事出版）  * 「人物と文学作品」項で高田十郎をとりあげる。「著書は「奈良百題」「奈良雑筆」など膨大な量にのぼり、まだかなりの遺稿が未発表のままとなっている」。</p>
昭和55年	1980	<p>森川辰哉「大和の先覚者 高田十郎」（『真珠の小箱』3〈奈良の秋〉角川書店）  * 「『奈良雑筆』と題する五十年にわたる記録三百八十二冊」。</p>
昭和56年	1981	<p>乾健治『郷土歴史人物事典 奈良』  * 「高田十郎」項に「随筆『奈良』（五七冊）、『奈良雑筆』（三八四冊）」。</p>
昭和63年	1988	<p>田熊信之「宇智川摩崖仏経石刻」（『武蔵野女子大学紀要』23）  * 宇智川磨崖碑の研究史を述べるなかで「考古家の高田十郎「不動川涅槃経摩崖碑」（『奈良雑筆』第二七、明治四四年七月「五條遊記」其二）（なお高田は昭和二年六月にも同誌巻二〇二誌上で本石刻を紹介する文を載せている。）と記す。  平山敏次郎「解題」（『諸国叢書』第6輯、成城大学民俗学研究所）  * 「かつて十郎氏没後に蔵書のうち幾許かが古書肆の店頭で見かけられた。この人には「奈良雑筆」と題した稿本三百余冊があったと聞いているが、それもご遺族の手で守られていればよいかと案じている。未見の書ではあるが、これは新しい見聞随筆と申すべき好著であろうと考えている」。  山田熊夫『奈良町風土記』続々編（豊住書店） * 「高田十郎」項。  * 「明治四十年（一九〇七）から四十五年間にわたって見学、調査報告、随筆といった形で三八二巻となり（中略）いずれも紙に毛筆で記され、一卷毎に完備されている（中略）先生の書き残された「奈良雑記」の公開を希望する次第である。先生は郷土家と呼ばれるのは好まなかった」。  * 文中の「『奈良雑記』」は、『奈良雑筆』の誤記ないし記憶違いと判断できる。</p>
平成元年	1989	坪井良平『梵鐘と考古学』（ビジネス教育出版社）
平成8年	1996	<p>塩澤寛樹「湛慶様式に関する基礎的研究」（『鹿島美術研究』年報第13号別冊）  * 本文中に書名を掲げる『土佐金石一斑』への注に次のように記す。  「高田家蔵『奈良雑筆』巻二百三十所収。坪井良平『日本古鐘銘集成』（1972年3月角川書店）によれば本書は、十九世紀に稲毛実が蒐集したと思われる拓本（現焼失）を昭和三年に奈良の高田十郎が高知図書館で筆写したものと」</p>



【表 4】 諸文献が記す『奈良雑筆』の冊数 \* [ ] に記載の筆者・年代は【表 3】に対応する

382 冊	「明治四〇年の秋から書きはじめられ、昭和二七年一月二六日に至るまで三八二巻の膨大な量となっている」〔澤田 1959〕 「『奈良雑筆』と題する和紙綴りの半紙本に仕上げた。その全巻数は三百八十二冊に及ぶ」〔坪井 1977〕 「『奈良雑筆』と題する五十年にわたる記録三百八十二冊」〔森川 1980〕
383 冊	「昭和二十七年一月現在三百八十三巻という膨大なものとなつた」〔後藤 1953〕
384 冊	「随筆家にして『奈良雑筆』三百八十四冊は、明治四十年から五十年間の見聞、調査、随筆などの記録である」〔乾 1972〕 「『奈良雑筆』(三八四冊)」〔乾 1981〕

～1971)によれば、その前日「深夜、読書を終えられ「ああ疲れた」と、その日の日記を書き終えて、横臥の瞬間、脳溢血にたおれ」たという。

高田の没後、その年のうちに追悼あるいは記念の催事があったのではと思われるが、いま詳細をつかめていない。ただ本稿の関心からは、後藤捷一(1892～1980)<sup>(6)</sup>が「没後君を偲ぶ会が開かれた際、他の遺著と共に奈良県立図書館と橿原の建国会館とで展覧せられた」と述べているのが注目される〔後藤 1953〕。県下の2箇所で同様の展示がなされたのであろうか。

後藤は「勤務の都合でこの会合に出席し得ず、いつかは雑筆の全巻に眼を通したいものと念願してゐたが、本年(杉崎注、昭和28年〔1953〕)四月二十三日この希望が達成して一日がかりで漸く見ることを得た」という。「私は敢えて「読む」とはいはず「見る」の言葉を使用したい。読みたい文字に全巻が埋つてゐて、一々これを読んでゐてはいつ果つるかも知れないから、一湧千里読まずに見ていつたのである。雑筆の後半には交友期間が永かつたゞけ、到所に私の名が現れ面はゆい感じをした」と所感を述べているが、後藤は『奈良雑筆』の全貌を通覧しえた、少なくとも県外在住であった人物のうちでは数少ない一人であつたろう。

## (2)『奈良雑筆』の体裁と冊数

後藤の文章からもう一節を引いておこう。いわく、「尤も奈良と題しても奈良で書いた随筆の意で、奈良のことを書いた随筆でないことはいふまでもない。最初の若干冊は、半紙版の罫紙を使用してあるが、後はすべて半紙に毛筆の墨書で、近年のものには色彩入の口絵などを添へ一巻毎に仮綴にし、巻数をつけて五箇の日本式本箱を埋めてゐる」。

『奈良雑筆』の対象が奈良という地域にとどまらないことは、【表 1】に掲げた巻 161 までの略書誌によるのみでも追認できる。また判型や用紙についての記述は、「奈良雑筆目録」凡例の第 9 項で高田が「用紙ハ、スベテ半紙ガタデ、大正二年ノ上半頃マデハ罫紙、以后ハ白紙ヲ普通トシテキル」と記しているのとも符合する。後藤は「『奈良雑筆』巻三百十六の第一丁表(実物大)」を図で掲げており、各巻とも半紙を二つに折って「仮綴じ」した判型、概ね現在でいう B 5 サイズ縦型に近い大きさであったことがわかる。また「毛筆の墨書」による記入だったことは、澤田四郎作も「すべて毛筆を以て書き綴つて来られ」〔澤田 1943〕あるいは「みずから墨筆をとり、氏一流の特徴ある筆跡で」〔澤田 1959〕と述べている。

それでは、高田の没後に残された『奈良雑筆』は何冊からなっていたのであろうか。これについては、諸文献の間にいささかの相異が認められる【表 4】。

全容を通覧した後藤の著述に 383 冊とあり、高田の教え子である乾健治が 384 冊とあるのも気にかかるのだが、澤田四郎作・坪井良平・森川辰蔵の三者が記す 382 冊という数字に、一応の信を置いておくべきであろうか。

ただ注意すべきは、澤田が、昭和 27 年（1952）1 月 26 日の段階で 382 冊であったと記している点である。1 月 26 日というのは高田により巻 382 に記されてあった日付と解すべきに思えるが、生前の高田のもとで現認した日と解するならば、その時点で巻 382 が完結していたか途上であったかは微妙なところとなってくる。また高田はその年の 6 月 17 日深夜に脳溢血で倒れたのだが、前に澤田の著述から引いたように、その夜も日記を記していたという。果たして 5 か月のあいだ、冊数あるいは状態に何の変化もなかったであろうか。

高田の逝去時点での『奈良雑筆』の実数は、やはり判然としない問題として残される。

### （3）柳田國男と『奈良雑筆』——炉辺叢書への収録企画

大正 14 年（1925）4 月に刊行された東恩納寛惇『琉球人名考』の巻末に、同書をその一冊とする「炉辺叢書」<sup>(7)</sup>の広告欄があり、「続刊」の一つに「奈良雑筆 高田十郎氏」が挙がっている。同様の広告は昭和 2 年（1927）3 月刊の小山真夫『小県郡民謡集』まで確認できるのだが、ついに高田の『奈良雑筆』が同叢書につらなることはなかった。

昭和 18 年（1943）になって、柳田國男が高田の著書に寄せた序文のなかで「双方支度がひまどつて居るうちに、惜しくもふいになつてしまった」経緯を述べている。柳田は「色々と勧めて、やつと一冊だけ、其中から選み出したものを本にする約束をしてもらつた」というが、その契機をなしたのは「奈良雑筆目録」だったのではないか。

すなわち、「奈良雑筆目録」を掲載する『なら』31 号（大正 13 年 11 月刊）が高田からとどくや、柳田は目録を一覧して興味を高め、高田への交渉に及んだのではなかったか。そして「大急ぎで「炉辺叢書」の近刊と予告した」のが翌年 4 月刊『琉球人名考』の広告欄、ないしそれに先立つ何らかの広告であったのではないかと考えられるのである。

### （4）坪井良平と『奈良雑筆』——梵鐘銘文の情報源として

情報源ないし資料集としての参照は、坪井良平（1897～1984）の著述が早い。坪井は「梵鐘の資料を集大成し、梵鐘の歴史の実態を明らかにし」「他方、日本の中～近世墓標の悉皆調査に基づく先駆的研究などを試み「歴史考古学」の確立を先導した篤学の士」<sup>(8)</sup>と評される在野研究者で、高田との交流は大正 12 年（1923）2 月には始まっていた<sup>(9)</sup>。

坪井は、梵鐘に関する著述において『奈良雑筆』をたびたび典拠として記している〔坪井 1939、1955、1970、1972〕。坪井によれば、巻 230 には高田が昭和 3 年（1928）に「高知図書館」で閲覧・筆写した成果が収められていたようだが、高知県立図書館は坪井も記すごとく昭和 20 年（1945）7 月の戦災に遭っており、疎開寸前の蔵書 13 万点が焼失したという<sup>(10)</sup>。高田は、後に失われてしまう資料をも『奈良雑筆』に記しとどめていたのである<sup>(11)</sup>。

なお坪井は、高田の人物像と『奈良雑筆』について「先生は常にノートと鉛筆とを携帯していて、人の話を聞いて書きとめる必要があると思うと「一寸待った」といっては、その要点を書きとめる（中略）先生はそれらの話とそのほかの所見、感想等を克明に随筆風に書き



綴って、『奈良雑筆』と題する和紙綴りの半紙本に仕上げた」と回想している〔坪井 1977〕。

#### （５）田村吉永と『奈良雑筆』——宇智川磨崖碑に関する情報源として

奈良県五條市、国宝の八角円堂で名高い栄山寺の近くに「宇智川磨崖碑」（国指定史跡）がある<sup>(12)</sup>。文政元年（1818）の狩谷棧斎撰『古京遺文』に収録され、早くから知られてきたものだが、風化が著しく銘文の視認が困難な状態となっている。この碑に関する文献として、しばしば『奈良雑筆』巻 27・巻 202 が挙げられている〔瀧川 1950〕〔福山 1951〕〔田熊 1988〕。ただし福山敏男（1905～95）が「栄山寺文献目録」〔福山 1951〕で「未見」と率直に記載しているように、それらはいずれも直接に『奈良雑筆』を参照したのではなく、近畿古文化叢書の一冊として刊行された『栄山寺』〔田村 1948〕に拠ったのだと考えてよからう。

その著者・田村吉永（1893～1977）は奈良師範学校出身で、昭和 6 年（1931）に大和国史会を創設、同 9 年から 19 年まで機関誌『大和志』<sup>(13)</sup>をほぼ月刊で発行した。同誌には高田が毎号のように寄稿している<sup>(14)</sup>。

なお川勝政太郎（1905～78）が昭和 5 年に創設した史迹美術同好会の機関誌『史迹と美術』には、『大和志』と並行する期間に田村そして高田の寄稿がたびたび見出される。

#### （６）藤森栄一と『奈良雑筆』——森本六爾に関する情報源として

高田の没後の文献では、早世した奈良出身の考古学者・森本六爾（1903～36）に関する、藤森栄一（1911～73）の著述が目をひく。高田と森本とは交流があり、前項で記した大和国史会の機関誌『大和志』第 3 編第 3 号（1936 年 3 月）に「最後に会った森本君」を寄稿している。なお同誌の第 3 編第 2 号（同年 2 月）は、巻末に「森本六爾追悼録」を載せている。

藤森は、昭和 8 年（1933）に奈良に滞在、森本との交流が始まっている<sup>(15)</sup>。森本が世を去った後、藤森は同 12 年（1937）にも奈良に滞在しているが、いずれかの折に高田とも知遇を得ていたのかもしれない。ただし閲覧したのが高田の生前か没後かは明らかでなく、いかなる情報が『奈良雑筆』によるのか、当該の巻次・年代も含めて記載されていない。

#### （７）その他

戦後ではその他、NHK 奈良放送局長であった小林喜久一（号・月史）が『奈良県観光』<sup>(16)</sup>紙上の連載のなかで高林寺（奈良市）をとりあげた際、『奈良雑筆』を参照している〔小林 1962〕。ただし当該の巻次・年代は記載されていない。また『奈良市史 地理編』に「旧市内の道標については高田十郎の『奈良雑筆』（明治末年）に詳しく記されている」とある〔堀井 1970〕。なお執筆者の堀井甚一郎（1902～？、戦後は奈良学芸大学〔現・奈良教育大学〕教授）は、高田とは奈良県師範学校で同僚であり、先述の森本六爾とは「親友」の間柄であった<sup>(17)</sup>。

#### （８）公刊された著述との関係

後藤捷一は『『奈良雑筆』に表れた私の図書室』で、高田から寄贈を受けた著作を列挙し「これらが全部といつても過言ではない程『奈良雑筆』の子本であることを思へば、雑筆は高田君の代表作であり、事実四拾年近い歳月の緒余に成つた結晶でもある」と讃えた。また同じ

文中で、「曩に刊行せられた『随筆民話』『随筆山村記』『奈良百題』など、何れも『奈良雑筆』からの抽出であることを思へば、この雑筆中には如何に貴重の資料が豊富に含まれてゐるか想像に難くない」と述べている〔後藤 1953〕。手控え帳としての『奈良雑筆』の性格をよく伝えていよう。また、いかなる多彩な内容が『奈良雑筆』に書きつけられていたのか、それは高田の著書や新聞・雑誌への寄稿の数々から、いくらかは見通すことができるのであろう。

また高田は大正3年（1914）に『奈良県風俗誌』の編纂委員となったが、奈良在住の民俗学研究者だった笹谷良造（1901～69）は、同資料が奈良県立図書館に収まる前には高田が保管していた期間があり、これをもとに民俗誌を作成する試みを行っていたこと、「自刊自筆の『奈良雑筆』などにもしばしば利用してい」たと述べている〔笹谷 1958〕。『奈良県風俗誌』→『奈良雑筆』における手控えの作成→高田の著述、という参照／活用関係に留意したい。

さらに『奈良雑筆』の形成・蓄積と個人雑誌『なら』の刊行が並行していた期間があることから、両者の間にも参照／活用関係が想定できるだろう。

## おわりに

高田の逝去から20年余りを経た昭和48年（1973）、テレビ番組「真珠の小箱」<sup>(18)</sup>で「大和の先覚者 高田十郎」と題する回が放映された。いまこれを視聴する手だてをもたないが、内容は書籍『真珠の小箱』で知ることができる<sup>(20)</sup>。高田の遺族にも取材しており、人と業績に関する好文献といってよい。また案内役の森川辰蔵（1904～80）は奈良師範学校での教え子であり、県下で教職を歴任後、高田が創設した奈良郷土史会の会長を務めた人物であった<sup>(21)</sup>。

高田先生の学問は非常に幅が広いので、「先生の学問はいったい何といたらいいんですか」と伺ったことがあります。すると、「まあ、雑学か」とおっしゃったんです。

（中略）

高田先生は、時代に先がけて先頭に立って学問の道を掘り下げてゆかれたという感じが深いのです。いまいろいろ言われていることも、先生はずっと前にちゃんと見て調べておられたような気がするんです。非常に尊いと思います。

先生は権威が大きらいでして、庶民のなかのほんとうの学者だったと思います。

番組中で森川が語った評から引用したが、「奈良学」を体現する在野研究者としての人物像をよく伝えていよう。そしてこの番組では、『奈良雑筆』もブラウン管に登場したようである。

放映から50余年が経過する現在、高田の人物像は文献を通じて知るよりほかない。平成期以降、人文学の諸分野から若干の論及がなされているものの<sup>(22)</sup>、業績の総合的な把握による再評価は今後の大きな課題であるといえる。それは活字となった著述の多彩さ膨大さ<sup>(23)</sup>ゆえに容易ではないのだが<sup>(24)</sup>、手控え帳『奈良雑筆』の存在を視野に入れ、高田が獲得・

維持していた「知的生産の技術」<sup>(25)</sup>——その一端は、本稿でとりあげた「奈良雑筆目録」とその「はしがき」からもかいまみることができるだろう——に思いを致すことも肝要かと思考する。

最後に、【表3】に掲出した書誌との重複を含むが、高田十郎の人物像に関する文献として、管見に入ったものを【表5】に一覧化した。あわせて向後の参考に供することとしたい。

【表5】 高田十郎の人物像に関する文献目録稿

昭和9年	1934	大高生「高田先生の横貌」(『地理と歴史』6-4) * 同号には高田の随筆「奈良に住みて」を掲載。
昭和18年	1943	水守亀之助「跋一わが思い出」(高田十郎『奈良百題』南山出版社)
昭和28年	1953	水守亀之助「高田十郎先生のこと」1・2(『播磨』23・24) 古澤礎石「高田十郎先生を憶ふ」(『播磨』24)
昭和34年	1959	柳田國男「高田十郎君のことなど」(同『故郷七十年』のじきく文庫) 澤田四郎作「高田十郎伝」(『日本民俗学大系 10 口承文芸』平凡社) [再録]『播磨』67(西播史談会、1967) * 口絵に「高田十郎小照」「全人の生家」。
昭和42年	1967	北村信昭「反骨のリベラリスト 高田十郎における回想的人間像」 (『奈良県観光』130) 水木直箭「高田さんの文章」(『奈良県観光』130)
昭和47年	1972	『大和百年の歩み 社会人物編』(大和タイムス社)
昭和48年	1973	『まほろば』16(奈良県高等学校国語文化会) * 「高田十郎先生 特集」。
昭和52年	1977	坪井良平『失亡鐘銘図鑑』(ビジネス教育出版社)
昭和58年	1978	宮本常一「渋沢敬三 民俗学の組織者」(『日本民俗文化大系5』講談社) [再録] 宮本常一「渋沢敬三」(『宮本常一著作集50』未来社、2008年)
昭和55年	1980	森川辰蔵「大和の先覚者 高田十郎」(『真珠の小箱』3 奈良の秋 角川書店) 黒田康子「想い出すことども」 (同編『この海のつづきの海を 黒田昇義遺韻』綜芸舎)
昭和56年	1981	乾健治『郷土歴史人物事典奈良』(第一法規出版) * 「高田十郎」項。
昭和63年	1988	山田熊夫『奈良町風土記』続々編(豊住書店) * 「高田十郎」項。
平成14年	2002	平井漢「相生の生んだ民俗学者・高田十郎」(『歴史と神戸』41-3)
平成15年	2003	平井漢『相生の生んだ 民俗学者高田十郎』(自刊) 山上豊「高田十郎」(奈良県立奈良図書館報『うんてい』74) * 「“温故知新” 県立図書館開館 100 周年に向けて 図書館をめぐる人々 (1)」 と題する記事中の分担執筆部分。高田の教え子・仲川明による似顔絵も掲載。
平成16年	2004	池田末則「『奈良学』研究の泰斗—高田十郎の大冊資料の公刊成る」 (『なら—高田十郎雑記』[クレス出版による復刻版]の内容見本に掲載)
平成19年	2007	『郷土史家人名事典—地方史を掘りおこした人々』(日外アソシエーツ)
平成27年	2015	浦西勉「奈良県における民俗調査を通して地域郷土文化史を研究した先達」 (『奈良女子大学文学部研究教育年報』12)
平成29年	2017	山上豊「奈良の郷土史家高田十郎と澤田四郎作」 <a href="https://www.nara-wu.ac.jp/naragaku/report/sawada2017.pdf">https://www.nara-wu.ac.jp/naragaku/report/sawada2017.pdf</a>
令和2年	2020	黒岩康博「高田十郎」(『新大和人物志』(『月刊なら』264)

## 註

- (1) 柳田國男「随筆民話序」(高田十郎『随筆民話』桑文堂、1943年)。本稿【表3】も参照。
- (2) 高田十郎「家蔵品の小展観」(同『奈良百題』青山出版社、1943年。原題「奈良随筆」『美術と趣味』6-5、1941年)。
- (3) 『なら—高田十郎雑記』(クレス出版、2004年)。内容見本が下記リンク先で公開されている。  
<https://kress.lolitaupunk.jp/pdf/241.pdf>

- (4) ただし国立国会図書館所蔵分には一部に欠号があり、その分は注3前掲の復刻版の参照を要する。
- (5) 秋山虔「随筆」項（『日本大百科全書』小学館、1985年）。
- (6) 後藤は大阪に住した染織書誌学研究家であった。  
「後藤捷一 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）  
<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10241.html>（閲覧日 2024-12-01）
- (7) 灯籠叢書については下記の文献がある。  
①大藤時彦「『灯籠叢書』総解説」（同編『灯籠叢書解題集』〈灯籠叢書別冊〉名著出版、1976年）  
②松本三喜夫「柳田「民俗学」への底流 柳田国男と「灯籠叢書」の人々」（青弓社、1994年）
- (8) 坂詰修一「坪井良平著『梵鐘と考古学』」（『史学雑誌』99-4、1990年）
- (9) 角南聡一郎「墓石研究と民俗学—柳田以前・以後—」  
〈小特集 京都で読む『先祖の話』〉（『日本民俗学』276、2013年）
- (10) 高知県立図書館公式サイトで公開されているファイル「沿革：高知県立図書館」に拠った。  
<https://otopia.kochi.jp/library/tmp/%E6%B2%BF%E9%9D%A9%E7%BC%88H29%E7%9C%8C%E7%AB%8B%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8%E7%BC%89.pdf>
- (11) このことに関し、青山茂（1924～2013）が、春日大社境内所在の灯籠について記す次の一節にも注意しておきたい（同『大和歴史散策③奈良・生駒』〈カラーブックス488〉保育社、1980年）。  
明治以後については、郷土史家高田十郎氏が、大正末から昭和初年にかけて調べた石燈籠千七百八十基、釣燈籠千二十四基というのが最も信すべき数とされてきた。しかし、昭和四十八年に帝塚山大学の女子学生が一年がかりで調べた結果、石燈籠千七百六十九基、釣燈籠八百四十三基に減っていた。釣燈籠の約二百基の激減は、終戦後の混乱期に盗まれて鋳潰されるという悲運にあったものの多いことを物語っている。  
高田は、調査結果を「奈良春日神社ノ釣燈籠ノ銘文」1～12（『なら』19～47、1923～27）・「春日乃石燈籠」1～3（『なら』48～50、1928～29）に発表している。  
なお目下言述等をつかめていないが、帝塚山短期大学で教鞭をとり「奈良学」を提唱した青山が、先人たる高田十郎をいかにとらえていたかには興味がかかる。
- (12) 近時の総括的研究に、神田雅章「宇智川磨崖碑に関する一試論—本生譚の美術として—」（『龍谷大学論集』496、2020年）がある。
- (13) なお戦後に近畿日本鉄道の文化事業として始まった近畿文化会は、大和国史会を前身としている。  
①近畿文化会事務局編・刊『『大和志』『近畿文化』総目録』（1992年）  
②猪熊兼勝「近畿文化会の思い出」（『近畿文化』872、2022年）
- (14) 個人によるサイトであるが、「春秋堂文庫」（管理運営：加藤春秋）で総目録を一覧することができる。  
<http://shunjudo-bunko.site/yamatoshi/yamatoshi.html>
- (15) 藤森栄一『藤森栄一の日記』（学生社、1976年、のち『藤森栄一全集』15、学生社、1985年）、同『心の灯』〈ちくま少年図書館〉（筑摩書房、1971年、のち『藤森栄一全集』2、学生社、1980年）。
- (16) 『奈良県観光』（旧称『奈良県観光新聞』）については以下を参照。  
①青山茂『大和寸感 奈良・大和路の昭和春秋』（青垣出版、2005年）  
②鷺森浩幸『月刊紙『奈良県観光』記事集成（稿）』（鷺森浩幸、2024年）
- (17) 堀井甚一郎「森本六爾君を憶ふ」（『大和志』3-2、1936年）、同「少年時代からの親友森本六爾氏を偲ぶ」（『大和史学』4-1、1968年）。浅田芳朗『考古学の殉教者 森本六爾の人と学績』（柏書房、1982年）。
- (18) 「真珠の小箱」は近畿日本鉄道提供・毎日放送製作のもと、1959年3月から2004年3月までの45年間にわたり、全国各局により放映されていた長寿番組であった。近畿各地の歴史・文化財・風土を題材とし、2314回を数えたという。以前、インターネット上にその一覧を掲げたサイトがあったと記憶するが、いま見出すことができない。番組の概要はさしあたり、フリー百科事典「ウィキペディア（Wikipedia）」の「真珠の小箱」項を参照した。
- (19) 昭和48年（1973）10月5日（金）22:45～23:00放映。放映日時は『奈良県観光』第203号（同年10月10日付刊）4頁の情報欄（「かんこう抄」）に拠った。
- (20) 『真珠の小箱 3 奈良の秋』（角川書店、1980年）。内容は概ね放映時の構成に準じているようである。ただし番組の放映年月日は記載されていない。
- (21) 森川辰蔵の略歴については「奈良県歴史文化資源データベース」（奈良県文化・教育・くらし創造部

文化資源活用課が管理運営するウェブサイト)の「森川辰蔵氏収集資料(所在:奈良県立図書情報館)」(記入年月日として「2018/06/30」とある)登載情報に拠った。

<https://www.pref.nara.jp/miryoku/ikasu-nara/bunkashigen/main10127.html>

- (22) 管見に入ったものを列記する。

①黒岩康博「高田十郎『なら』に見る近代大和の「地域研究」ネットワーク」(『日本史研究』525、2006年、同『好古の瘴気 近代奈良の蒐集家と郷土研究』慶應義塾大学出版会、2017年)

②安井真奈美「近代大和の民俗資料「奈良県風俗誌」—高田十郎の関わりを中心に—」(『比較日本文化研究』11、2007年)、同編『出産・育児の近代『奈良県風俗誌』を読む』(法蔵館、2011年)

③内田好昭「近代日本と拓本収集—高田十郎の拓業をめぐって—」(久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光芒と古都奈良 大和の生き字引・水木要太郎』思文閣出版、2009年)

④高木史人「方言研究と昔話研究—高田十郎の場合—」(『口承文芸研究』33、2010年)

⑤角南聡一郎「墓石研究と民俗学—柳田以前・以後—」(『日本民俗学』276、2013年)

また筆者は以前、奈良に住し日本美術院第二部の国宝修理に画工として従事した日本画家・古美術研究家の久留春年(1881?～1936)に関する探索をまとめた小論において高田十郎に言及した。また筆者と並行して久留の著作を分析した板野孝則氏(帝塚山大学大学院人文科学研究科博士前期課程、当時)も、その報告で高田に言及した。その後の筆者の続稿と併せ書誌を掲げておく。

⑥杉崎貴英「久留春年探索序章」(『奈良学研究』22、2020年)

⑦板野孝則「久留春年編『正倉院式文様集』・『古代芸術拓本稀観』について」

(『日本文化史研究』51、2020年)

⑧杉崎貴英「久留春年探索拾穂」(『奈良学研究』25、2023年)

- (23) 本稿冒頭に引いた柳田國男の文章にいう「高田君は名代の筆豆であつて、しかも発表欲の少しく淡い人である」という人物評の後半は、したがって事実と反しているといえるが、新聞・雑誌という媒体そして『奈良雑筆』という手控え帳での執筆量の膨大さに比して図書の刊行は多いとはいえないため、その点では当たっているともいえる。

- (24) たとえば、池田末則によると「奈良新聞の「大和随筆」連載は実に七〇〇回を算えた」というが(「『奈良学』研究の泰斗—高田十郎の大冊資料の公刊成る」『『なら—高田十郎雑記』内容見本掲載、クレス出版、2004年)、いま詳細を把握しえていない。

- (25) この語は梅棹忠夫(1920～2010)の『知的生産の技術』〈岩波新書〉(岩波書店、1969年)に拠った。

[付記] 本稿の内容および前提となる資料収集には、JSPS 科研費 23K00182(研究課題名「仏像作例をめぐる再認識と理解形成の追跡—郷土史／在野研究／仏教考古学に注目して—」)による成果が含まれる。

